

第四百十五回 青葉会

令和二年十一月二十六日 午後一時半～五時 於：文京区民センター会議室

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 柿崎忠彦 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ

星田啓子 山崎亜也

投句・選句 伊賀山そらお 小早健介 小西弘子 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか

中川雅夫 長谷見びん 福島正明 古田昇 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

投句のみ 楠田ヒロミ(彦十)

選句のみ 赤田堅 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆

松崎浩 村田くに子 山本三恵

《互選句》 ○は特選 ◎は孤舟選者の選

十一點 嘶終えて嘶冢寒き貌(かお)となる 恵洲(○そ・忠・堂・ゆ・び・○啓・く・

○亜・○天・け・三)

◎小雨降り手締め静かに一の西 ただしげ(紀・孤・○弘・忠・恵・隆・正・浩・く・

盛・け)

九點 檻にゐてなほ大鷹の孤高かな 孤舟(堅・眞・紀・健・五・ゆ・規・け・○三)

八點 林檎たわわぶつかりさうな五能線 忠彦(眞・そ・紀・健・千・た・ゆ・天)

◎漁と言ふ生業絶えし島の冬 びん(眞・紀・孤・○た・龍・啓・○浩・○亜)

七點 ◎入日時しばし華やぐ蜜柑山 そらお(紀・孤・ゆ・○雅・び・浩・三)

◎その中に指揮官のゐて鴨の陣 昇(忠・○孤・五・○健・○千・規・け)

六點 口ひんまげ吊るさる鮭の大往生 紀久男(恵・堂・浩・○盛・天・け)

◎竹林を背に古民家の小春かな 恵洲(そ・孤・た・龍・び・規)

我武者羅に生きて勤労感謝の日 忠彦(紀・そ・健・昇・○規・天)

◎大観覧車点りて冬日暮れゆけり びん(そ・孤・弘・千・正・亜)

屋形船侘びて連なる冬の河岸 全(そ・紀・正・啓・く・盛)

読経する我が背にぬき冬日かな 雅夫(堅・○紀・弘・恵・隆・敏)

◎娘より意中明かさる神無月 亜也(眞・忠・孤・千・隆・び)

ペランダの吊り大根や風を聞く けい子(紀・○眞・た・恵・正・く)

五点

浮世絵の女も濡るる初時雨

孤舟(忠・五・龍・正・盛)

あの悪童が叙勲とは文化の日

昇(敏・隆・浩・亜・け)

四点

霜の朝しづかに人を歩ましむ

孤舟(眞・紀・堂・規)

新酒来る盃選びまた楽し

忠彦(堅・紀・千・堂)

◎句作りを始めて日々が文化の日

仝(紀・孤・ゆ・隆)

ドラマーの躍るスティック冬銀河

堂哉(紀・○正・○昇・啓)

新牛蒡鼻腔を抜ける命の香

啓子(紀・弘・亜・三)

浅漬けの壬生菜まぶして飯知足

亜也(紀・健・三・盛)

神無月風は静かに湖(うみ) ゆらす

けい子(堅・紀・た・浩)

◎籠る夜の寒柝江戸の名残かな

盛雄(堅・紀・孤・び)

三点

実家跡秋日に佇む妻の影

忠彦(紀・雅・敏)

新走りよくぞ男に生まれけり

孤舟(紀・健・昇)

美術展逸話も楽し肖像画

千恵(紀・敏・く)

与太郎のもてる嘶や冬ぬくく

恵洲(眞・弘・敏)

鉄棒の冷たさに堪え懸垂す

そらお(紀・雅・亜)

かりんの実裸の枝に黄を点す

五郎太(紀・ゆ・雅)

巢籠を癒す狭庭の菊一輪

ゆたか(そ・雅・昇)

半生を庭木と語る冬構(ふゆがまえ)

雅夫(紀・び・規)

錦木の敷きつむ庭に共白髪

仝(紀・○堂・三)

侘住居銀座恋ひしき日暮刻

正明(紀・龍・亜)

ウイズコロナ歓声抑えて紅葉狩

啓子(紀・健・昇)

新蕎麦や啜りつ唸る客ひとり

仝(紀・龍・敏)

晩秋の空見上げつつ妻逝けり

規雄(忠・び・け)

谷渡るカリオンの音や冬紅葉

けい子(紀・昇・く)

螻蛄の鳴く庭の見守陶狸

盛雄(紀・恵・雅)

二点

秋刀魚食べば上手下手あり皿の上

そらお(啓・天)

丹念に蜜柑の筋取り無念夢想

仝(紀・堂)

GOTO 京へ小春の人出三密に

紀久男(昇・盛)

天を衝く大クレーンや冬始め

五郎太(紀・堂)

道行の藤十郎よ近松忌

弘子(紀・○恵)

池に落ち命懸けなる紅葉撮り

健介(紀・隆)

キラキラと輝く火星や栗名月

ただしげ(紀・龍)

籠居をしばし忘れて熟柿食う

ゆたか(紀・天)

造船と寺町分かつ秋の水 (尾道)

びん(五・ゆ)

山茶花の褥一夜の夢のごと

昇(そ・五)

アングルリング池に投げ棄て終る夏

正明(紀・啓)

さまざまのここと思い出す墓掃除

規雄(紀・く)

鍋にして昨季以来の牡蠣の滋味

亜也(堅・紀)

白味噌で少し気取りて蕪汁

全(五・紀)

銀杏散り静けさもどる御堂筋

盛雄(紀・た)

新米と真つ赤なラベル貼り届く

天牛(紀・恵)

夕暮れや焼き芋売りの声流れ

そらお(た)

一点

「石切梶原」

糸に乗り仁左の口跡冴え渡る

紀久男(敏)

「坂田藤十郎逝く」

扇雀の頃妻と語らふ小春かな

全(千)

古書街にカレー店増ゆ秋の暮

全(規)

「まりさんを送る」

油絵の修復に生き万聖節

五郎太(紀)

あやふやな五十州の名小春かな

全(紀)

ひと言をアーユオーツケー感謝祭

全(紀)

はたはたと粉こぼしつ切山椒

弘子(紀)

あざやかに赤橙黄緑冬もみじ

全(紀)

抽斗にそっと思ひ出の手袋

千恵(忠)

今は柿次郎も富有も枯露柿も 全(盛)

◎煌々と星空に咲くハロウインの月 ただしげ(孤)  
草むしり行く手にカマキリとうせんぼ 全(浩)

「山寺」

◎忘れじの千の石段翁の忌 堂哉(孤)

冬の鷺蜥蜴唾へし刹那かな 全(啓)

「追憶」

七竈また七竈ハネムーン 全(五)

コロナ無き大空煌めく天の川 ゆたか(龍)

湯豆腐や夢にコロナは終息す 全(堅)

残菊やコロナのニュース聞いており 全(弘)

密を忌み北風の中カフェテラス びん(紀)

GOTTOトラベル客足戻る紅葉舟 昇(紀)

メルヘンのごと银杏散る並木道 全(紀)

走り去る国際列車散る木の葉 正明(紀)

紅き実の電飾に見ゆやまぼうし 啓子(紀)

青空を切り裂く機体菊花賞 全(紀)

何よりもご飯が馳走新嘗祭 亜也(天)

東京駅天皇の道銀杏黄に 天牛(紀)

床屋出てコートフードも被りけり 天牛(紀)

平和なる海に優遊鴨の陣 盛雄(紀)

.....

【句評】

十一句

「小雨降り手締め静かに一の酉」 ただしげ

恵洲さん・・・目黒の大鳥神社でも、今年は心無し手締めも元気なかったような・・・  
盛雄さん・・・いかにも俳句らしい手慣れた佳句

「嘶終えて嘶家寒き貌（かお）となる」 恵洲

堂哉さん・・・楽屋に入ってなら分かります。真打ではないのでしょうか?!  
天牛さん・・・嘶終えて嘶家が寒き貌をしたとありますが、どんな貌かわかりませんが、こういうのが上手い俳句でしょうね。

九句句「檻にゐてなほ大鷹の孤高かな」 孤舟

五郎太さん・・・檻に居る鳥を詠んで孤高に目を付けたところが良い  
三恵さん・・・人間に捕らわれていても、それに媚びることなくなお「威厳」  
「力強さ」を捨てない鳥類の王者でしょうか、かっこいいですね。

七句句「その中に指揮官のゐて鴨の陣」 昇

忠彦さん・・・鴨の群自体はどこと言って面白くないものだが、鴨の陣と指揮官が居るといふ見立てが面白い。  
孤舟さん・・・「指揮官」が面白い。一斉に整然と動いている様子が見える。  
五郎太さん・・・「鴨の陣」としたところが良いですね。  
健介さん・・・数年前に詠んだ拙句、「群ごとに軍師いるらし鴨の陣」が珍しく  
高得点を頂戴しましたが、同じ思いを上手く詠まれました。

六句句「口ひんまげ吊るさる鮭の大往生」 紀久男

恵洲さん・・・吊るされる鮭を「口ひんまげ」と表現した俳諧味  
堂哉さん・・・目に浮かびます！ユーモア感！  
盛雄さん・・・豪快な作品。上五、下五が効果的。

「ベランダの吊り大根や風を聞く」 けい子

眞希子さん・・・どんな世代の主婦が大根を干しているのか？一昔前はこの時期、八百屋に干し大根を十本束ねたものが沢庵漬け用に売られていたが今は全く見ることが

できない。コロナ禍続く中生活の知恵が鉄筋マンションのベランダに再現されて  
喜ばしく感じられた。

恵洲さん・マンションのベランダにも季節感あり

六点句「読経する我が背にぬくき冬日かな」 雅夫

恵洲さん・小春日の背中の中もぬくもりがよく感じられる。

紀久男・・・成城学園の社宅時代、先輩が日蓮宗で毎朝読経（太鼓打ち乍ら）され  
て閉口したことを思い出しました。作者は門徒ですから静かでしょう。暖かい冬日  
を背に受けて日々好日仕合せが窺える好句です。

「娘より意中明かさる神無月」 亜也

孤舟さん・神様は出雲に集まっているのに、娘はこの時にとばかり連れて来た・  
親の気持ちは・・・

五点句「浮世絵の女も濡るる初時雨」 孤舟

盛雄さん・艶のある一句が出来上りました。青葉会にも粹人が居て好感が  
持てます。

「屋形船侘びて連なる冬の河岸」 びん

盛雄さん・コロナ感染の第一波で大きな災難であった。中七が上手。

「我武者羅に生きて勤労感謝の日」 忠彦

規雄さん・我武者羅と勤労感謝の取り合わせが良いですね。我々の世代  
（昭和37年入社）はホントに我武者羅に仕事をしました。それでいて勤労感謝  
ですからね。若き日を想い出させてくれた好きな句です。

四点句「新酒来る盃運びまた楽し」 忠彦

堂哉さん・私も今晩は盃を慎重に選びました

「ドラマーの躍るステイック冬銀河」 堂哉

啓子さん・ジャズライブでしょうか、ステイック捌きを 踊ると詠い、季語に  
冬銀河を合わせ、大人の時間のきらきら感が感じられます。

「浅漬けの壬生菜まぶして飯知足」 亜也

盛雄さん・飽食の時代に爽やかな一句。壬生菜は春の季語だが季節の先取りで

選びました。

三点句 「鉄棒の冷たさに堪え懸垂す」 そらお

亜也さん・・・冬の鉄棒は本当に冷たい。その冷たさと握る鉄の匂いまで感じられよく表現されたと思う。

「錦木の敷きつむ庭に共白髪」 雅夫

堂哉さん・・・コロナ騒ぎの中、なんとも幸せ感に満ちた景色です！

紀久男・・・原句は「錦木の庭敷眺む共白髪」

「新蕎麦や啜りつ喰る客ひとり」 啓子

龍平さん・・・どんな方、喰っているのは何、興味津々

「侘住居銀座恋ひしき日暮刻」 正明

孤舟さん・・・日暮刻は季語にはならないため、この句は無季語です。

「螻蛄の鳴く庭の見守陶狸」 盛雄

恵洲さん・・・螻蛄鳴きの寂しい音と狸のひょうきんな顔の対比

※螻蛄は夏の季語ですが、螻蛄鳴く、となると秋の季語となります。

二点句 「秋刀魚食えば上手下手あり皿の上」 そらお

啓子さん・・・「あるある」の景色をそのまま映して面白いと思いました。

「GOTO京へ小春の人出三密に」 紀久男

盛雄さん・・・嵐山も清水寺も人気スポットの賑いは久しぶりでした。

「天を衝く大クレーンや冬始め」 五郎太

堂哉さん・・・大阪駅前の阪神が超高層ビルに変わっています。様変わりです！

「道行の藤十郎よ近松忌」 弘子

恵洲さん・・・藤十郎の逝去と近松忌がタイミングよく取り合わされた。

「アングルリング池に投げ棄て終る夏」 正明

啓子さん・・・アングルリングなるものを知ったのは高校生の頃。ヘップバーン主演「昼下がりの情事」何とも素敵な紳士ゲイリー・クーパーが それを着けることで大人びて見せたかった彼女のアングルリングを 指でピキッと切り取り こんなものをするんじゃない と投げ棄てたシーンがまざまざと蘇りました。

「新米と真っ赤なラベル貼り届く」 天牛

恵洲さん・・・真っ赤なラベルに、新米の嬉しさが象徴されている。

一点句 追悼 坂田藤十郎 「扇雀の頃妻と語らふ小春かな」 紀久男

紀久男・・・人間国宝、文化勲章 元日本俳優協会々長、88歳で他界。

私は昭和38年就職で大阪へ。二代目鴈治郎 扇雀(三代目鴈治郎) 延二郎(後の延若) 十三代目仁左衛門 秀公(我當) 秀太郎 孝夫(後の十五代目仁左衛門)の上方芝居は東京で見られない(客に受けない為)、まったりした芸で私には新鮮で面白かった。当時の扇雀は人気絶頂で「扇雀館」が良く売れておりました。但し、その頃の彼は口跡悪く何を言っているのか分からぬことが多く好きになれませんでした。武智鉄二に鍛えられ21歳の時に「曾根崎心中」のお初を初演、これが当たり役となり「心中天の網島」の治兵衛、「恋飛脚大和往来」の忠兵衛など近松物の第一人者となりました。団十郎と張り合う意味もあって藤十郎を名乗ったと思いますが、一寸私には馴染めません。今を時めく海老蔵と共に華のある役者でした。街で出会ってもオーラを放っており、私にとっては 武原はん(楽屋入り口で、付き人は藤村志保) 以来でした。

「今は柿次郎も富有も枯露柿も」 千恵

盛雄さん・・・小生も柿は大好物、ほとんど毎日愉しんでいる。この句は今回の

ユニーク賞です。

\* \* \* \* \*

●次回青葉会 令和二年十二月二十四日(木) ウェブ句会と致します

▲当季雑詠投句 五句 (締め切は十二月二十三日中 二十四日夜 選句依頼配信予定)



### 令和二年十一月青葉会報

一 今回はご家族の反対を押し切ったの忠彦さんら八名出席。投句は、びんさんら十三名。

眞希子さん、天牛さんのFAX、孤舟選者からの「三田俳句丘の会 10周年作品集」

(10月1日角川書店3,000円)と「丘の風」創刊30号記念号(11月1日)を回覧し乍ら開会。小生持参の純吟「久保田 千寿」啓子さんと小生の煎餅を賞味しつつ五郎太さ

んの進行役で、ご覧のように 恵洲さん、ただしげさん、孤舟さんが、好成绩でした。

二 関係者近詠

十歳の背伸び葉月と祖母へ文 眞希子 もの憂げに落つる点滴大残暑 陽充

新涼やあるがままの句採られけり 全 限りあるいのちを今宵新走 全

唐辛子真っ赤に天指す迷ひ去れ 全 名月や雲居のよそのひと如何に 全

張り合って仲良し姉妹吾亦紅 全 秋鯖の糶り残されし鈎の痕 全

豊作の赤土粘る靴の底 全

刈萱の吹かるる道に吹かれゆく 弘子 コロナ禍に墓参でもめし家族かな 紀久男

稲妻や熱計りしと嘘をつく 全

白杖の手を取り秋の聖橋 全

ゐのこづち付く路恋し旅恋し 全

―――「森の座」十二月号―――

銀輪の列若草の風となる 孤舟 米粒は泪のかたち粽解く 孤舟

ひとたびは捨てしふるさと雪解川 全 ざり蟹の己が濁りに紛れ入る 全

逃げ水の中へ中へとレースカー 全 夢見るにほどよき高さハンモック 全

ふらここを漕いで地球を軽くせり 全 裏切りはユダに限らじ鳥兜 全

薄暑光盲導犬は眼閉ぢ 全 寒牡丹俘囚の句してゐたり 全

―――「丘の風」創刊30号記念号（三田俳句丘の会 二月一日）―――

籠る日のウクレレの音や山眠る 盛雄 顔見世や頭取部屋に手土産を 紀久男

人気なき芭蕉の句碑や初しぐれ 全 芭蕉忌や低迷脱皮願ふれど 全

賜盃手に新妻を抱く貴景勝 全 酉の市手締め好声音抑へをり 全

芭蕉忌や吟行叶はず一人吟 健介

時雨忌や旅人に険しこの月日 全

―――（きさらぎ句会 二月）―――

儀仗兵めく佇まい冬薔薇 正明 寒い街コロナ美人は闊歩する 堅

コロナ禍を押し向ふや美術展 全

三 有馬朗人さん80歳で死去（日経新聞より）

東大学長、文部大臣などを歴任され国際俳句交流協会々長も務められた。句集「黙示」で蛇笏賞。2010年文化勲章受章。

「光堂より一筋の雪解水」 「大阪も梅田の地下の冷しそば」

創刊、主宰した「天為」の高弟に社友の山内純二さんが居られます。（仙台在住 一家全員がメンバー）

四 日経俳壇より小生好みを抄出してみました（11月28日）

黒田杏子選 一、月夜茸増す汚染水溜むる森 桃心地（大船渡）

横澤放川選 一、千年の津波に遭ひて日向ぼこ 石の森市朗（石巻）

二、仮設消え柿栗林檎食えぬ村 清水義宏（相馬）

三、菊盛り役者盛りの菊五郎 小泉芝雲（船橋）

四、父母のありし確かさ青胡桃 稲垣 長（みよし）

一の選評・・・千年の津波、怖い言葉だ。その思いを無理にも判断停止させんとするか  
の日向ぼこ。心の奥底からの押さえきれぬ深い呟きよ。

三の選評・・・繊細さに重厚さを加えて立役と呼べなくなった人間国宝。菊尽しの  
実にあかぬけた讚嘆句だ。

令和二年十二月 十四日

紀久男 記